

現在のボン大学ドイツ学科にかかわる いくつかの事柄

胡 屋 武 志

豊かな自然を持つライン河畔の旧首都ボンはまさに「牧歌的」という形容詞がふさわしい。ケルン選帝侯の離宮であるポッペルスドルフ城の敷地から、鬱蒼と葉の茂るカスターニエンの樹が等間隔に並ぶポッペルスドルファー・アレーを通過して自転車でボン大学の中央研究棟に向かう。この小さな街は郊外に出るまでほとんど坂がなく、晴れた日に川沿いの専用道路で自転車を軽快にこぐのはそれだけで楽しいものだ。2005年4月から2006年11月現在まで私はこの地にあるライニッシェ・フリードリヒ・ヴィルヘルム大学（ボン大学）に在籍してきたが、ここで留学報告に代えて同大学哲学部ドイツ学科について簡単に紹介させていただきたい。

今回の留学における主な目的の中に、研究領域である初期ロマン派関係の文献資料を収集することとともに、ゲルマニストとして十分なドイツ語力を身に付けることがあった。特にドイツ語の聴解能力に大きな不足を感じていたこともあり、最初のセメスターはドイツ学科の授業のほかに留学課の外国人学生向けのドイツ語の授業を多く受講した。また、当初より2年間の留学を計画していたが、早稲田大学の交換留学制度を利用できるのは1年限りであり、留学を延長するためにはボン大学の正規課程の学生になる必要があった。ドイツの大学の正規課程に入るには大学入学資格ドイツ語試験（通称DSH）、もしくはゲーティンストゥート主催の上級試験（KDS, ZOP, Test DaF）に合格しなければならないが、私は2セメスター目の終わりにDSHに通り、3セメスター目からドイツ学科のマギスター課程に登録した。ドイツ学科はIドイツ語および中世文学、II近現代文学、IIIスカンジナビア学、IV比較文学、V民俗学、VIドイツ語教育（DaF）の各専攻からなるが、私は主専攻としてIIを副専攻としてIおよび哲学科を選んだ。マギスター課程では最初の二年で基礎課程、次の二年で本課程を履修し修士論文を提出すると修士号を取得できるが、この課程は一般に五年以上かかることが多い。こうしたことに加えてギムナジウム卒業が他のヨーロッパ諸国に比べ一年遅いことや兵役や非軍事役務、職業実習などで大学卒業の年齢が高くなる傾向が懸念されており、国際的な競争に負けない大学制度を模索する中でボン大学ドイツ学科も2006年冬学期から、これまでよりも短期間（通常3年）で学位を取得できるパッチェラー課程を本格的に導入することになったようだ。そのためマギスターの枠が大きく減り、同課程に入学することは通常の外国人学生にとって以前より難しくなったようだ。いずれにせよ、エリート大学化、学費導入などと併せて最近のドイツの大学は改革期の様相を呈している。

次は図書室について。私の知る限りでドイツ学科の学生図書室はドイツ文学、語学関係だけで6部屋ある。多くの学科図書室と同様に鞆やコートなどの荷物は図書室内へ持ち込めないで、中央研究棟3階にあるドイツ学科の受付で学生証と引き替えにロッカーの鍵を借り、4階のロッカーに荷物を収めてから再び3階に下りて図書室に入室する。受付を通過して左奥にある最初の部屋でまず目に入るのは同学科に在職した複数のゲルマニストのブロンズ像である。ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの作品や『ニーベルンゲンの歌』の翻訳、また詩人としての活動でも有名であったカール・ジムロック（1802-1876）の頭像や、ロマン派研究の大家オスカー・ヴァルツェル（1864-1944）らボン大学で教鞭を執ったゲルマニストの胸像の周りの書棚には多くの辞書類や資料が配架され、過去数年に開講されたゼミのプロトコルを閲覧できる。隣接しているコピー室ではドイツ学科の資料を複写することができ、学生たちはこの図書室をゼミ発表の準備やレポート作成のために頻繁に利用している。また、近代以降の文学の一次・二次文献などの資料は受付を右に入った二つの部屋にその多くが収められている。ドイツ学科図書室は16万冊を超えるその蔵書の豊かさにも目を瞠るが、二つの部屋の南東向きの窓から臨む眺めはとりわけ素晴らしく、都心を一望できる早稲田大学戸山キャンパスの第一研究棟11階のドイツ文学専修室からの光景に優るとも劣らない。大学正面に広がるホーフガルテンの広大な芝生の向こうにはライン河畔の山々ゾーベンゲビルゲが連なり、窓から身を乗り出すと、ニーベルンゲンの逸話で知られるドラッヘンフェルス（龍の頂）へ続く緑に満ちた山並みが映えている。右方には大学のプロテスタント教会、左方にはライン川へ至る公園の並木道を眺めることができるが、特に晴れた日の空の蒼さと植物の緑の対照は美しい。なお、図書室内の書籍は週末のみ貸し出し可。金曜に借りて月曜の昼12時までの返却が義務づけられている。ちなみに大学の中央図書館は、老朽化のため取り壊され2007年半ばまで改築中であり、図書は貸し出し可能であるがそのほとんどが閉架扱いで注文してから翌日以降に手に取ることができる。

2006年秋現在、図書室前の廊下ではドイツ学科主催のハインリッヒ・ハイネ関連の展示がおこなわれている。今年が没後150年にあたるハイネの書簡や原稿、七月革命時の検閲のオリジナル・複写資料などが収集・展示されており、ドイツ学科のホームページでは〈ハイネと音楽〉と題された音楽関係の資料などが閲覧できる（<http://www.germanistik.uni-bonn.de/content/forschung/heine>）。周知の通り、ハイネと音楽の結びつきは強く、ジルヒャーやリストのローレライを始めとして多くの作曲家によって彼の詩に曲がつけられている。しかし、ハイネ自身はもともと音楽に造詣が深い人物ではなく、むしろ書簡などにある言葉や彼の振る舞いからは音楽への無関心、軽蔑が読み取れることもあったようだ。こうした意味で〈ハイネと音楽〉という標題は挑発的である。ここで見る展示資料や二次文献は学生たちを中心にして集められたとのことである。

またドイツ学科の学生自治会が毎年2回発行している雑誌『Kritische Ausgabe』の活動は活発であり、ドイツの大学のゲルマニスティク自治会関連の雑誌の中でも評判は高い。財政難の時期もあったようだが、現在は社団法人ドイツ文学基金から助成を受けており経

済状況は安定している。毎号興味深い特集が生まれ、書評やドイツ各地で行われる文学関係の催しの紹介、様々な内容のフォルム、インタビューなども充実している。執筆陣も第一線で活躍するゲルマニストから作家やジャーナリスト、そしてボン大学の学生に至るまで多彩な顔ぶれである。Stern や Köln Stadt-Anzeiger などの各紙で紹介された前号の特集は「第三帝国と文学」であり、一部 3.5 ユーロ 500 部が完売したそうである。最新号の特集は「陶酔 Rausch」。酒や麻薬などによる陶酔・酩酊は長らく文学・思想において大きな意味を持ってきたが、陶酔は文学者あるいは作品と具体的にどのような関係があるのか、こうした問いをめぐって 10 人の執筆者がエッセイを寄稿し、様々に思考をめぐらせている。『エッセンバッハのジレンマ』と題された巻頭論文では、『ヴェニスに死す』におけるコレラとデュオニュソスのモチーフとの関係が、ニーチェやフロイトの概念を援用しながらトーマス・マン自身のノートにある「不気味な精神」という語を手がかりに分析されているが、その手際は鮮やかである。さらに、E.T.A. ホフマンのベルリンの居酒屋での酒豪生活、放蕩の限りを尽くしたあとのマルキ・ド・サドの獄中での執筆状況、パトリック・ジュースキント『香水』の主人公グルヌイユの香りによる酩酊について書かれた論考などそれぞれ興味深い。また、現在アーヘン大学のドイツ学科でゴットフリート・ベンについて修士論文を書いている若いインターン医による研究エッセイは、コカイン摂取について語った詩を含むベンの詩群『精神科医』の内容が脳神経の研究に関連してある種のアクチュアリティーを持つことを神経生理学的なアプローチから語っている。

最後に授業について。こちらに来てからゲルマニストとして著名なユルゲン・フォーアマン教授のレッシング啓蒙主義についての講義やミヒャエル・ヴェッツェル教授のフランス構造主義を全般的に扱った講義などを受講したが、なかでも興味深かったのは私の専門である初期ロマン派美学を扱ったプロゼミナールである。講師はパスカル・メモロ氏という若いゲルマニストである。かつてボン大学に近代演劇史についての博士論文を提出した戯曲の専門家であるが、最近は解釈学やロマン派の文学理論に関心があるもようで、印象としては思想系の比重が大きい。この授業は基礎課程の授業ということもあり、哲学理論的な初期ロマン派美学へのアプローチは若いドイツ学科の学生にとってやや難解なものだったようだ。副教材として授業でも頻繁に用いていたマンフレート・フランクの『初期ロマン派美学入門』の内容は、ノヴァーリス、シュレーゲル兄弟、シュライエルマッハーらの思想をドイツ観念論的な背景のもとに詳細に説明しているもので、初期ロマン派を専門としている人間にとっては必読といってよい書物だが、専門外の学生にとっては濃密すぎる内容で 30 人以上の参加者たちの中でも授業で発言する学生はごく限られていた。噛んで含むように話すメモロ氏のドイツ語はゆっくりとしたスピードで聞き取りやすいが、彼の発言の内容に反応できない学生に対してはときにいらだつ様子もみせ、授業の途中で帰ってしまうこともあった。しかし翌週は何もなかったように時間通りにやってきていつもの授業を続けていた。授業の内容、講師のキャラクターともに興味深いゼミナールであった。

また、現在私が受講しているゼミナールは哲学科のものだが、そこではフリードリヒ・

シュレーゲルの初期思想が主題的に扱われている。担当しているのはギード・クライス氏という分析哲学や批判理論哲学に詳しい若い講師であるが、上級者向けの授業ということもあり、ドイツ学科・哲学科の双方から参加する15名ほどの学生によって活発な議論がなされている。クライス氏がシュレーゲルについて話す言葉からは、彼の初期ロマン派理解がベンヤミンの反省理論やフランクの「相互証明」の概念を参照していることがわかる。その意味で今風なシュレーゲル思想へのアプローチであるが、例えば『ギリシア文学研究論』の序文を丹念に読み込みながら、カントの批判哲学、シラーの美学理論、フランス新旧論争について詳細に解説し、シュレーゲルの思想と対照させる様子は文献学的に忠実なテキスト解釈に基づく講師の真摯な研究態度がうかがえる。

蛇足となるエピソードを一つ。去年の夏学期中にボン大学の総合学生図書室でボンの地方紙 General Anzeiger を読んでいて知ったのだが、当時ボン大学ドイツ学科の研究員が同学科の図書室から貴重書、稀覯本の類を何十冊も持ち出し、それを古書店に売って金に換えていたという事件があった。こうした本が置かれていた図書室内の書棚には、盗難した本の代わりに古書店で買った同じような大きさの本が置かれていたという。その結果盗難の発見が遅くなったとのこと。